

報告書

「プルードン研究の現在－金山準『プルードン：反「絶対」の探求』を読む」

発表者：金山準（北海道大学）

討論者：福島知己（帝京大学）

討論者：伊多波宗周（京都外国語大学）

世話人：稲村一隆（早稲田大学）

本セッションでは2022年2月に刊行された金山準『プルードン：反「絶対」の探求』（岩波書店）（以下、「同書」）の書評会を開催した。同書は第39回渋沢・グローデル賞奨励賞を受賞したほど、すでに社会的に評価された著作であるが、あらためて社会思想史学会の場で同書の意義を検証するというセッションの趣旨が冒頭に司会の稲村から説明された。

次に著者の金山から、『プルードン』執筆にあたって想定していたこれまでのプルードン研究の概要、および同書の狙いについて説明がなされた。まず日本語圏の研究の大きな傾向として、マルクスとの関係およびアナキズムとの関係が支配的な関心であったこと、だがプルードンの思想それ自体を検討する上でそれらはやや外在的な文脈であることが指摘された。フランス語圏の研究については、20世紀末以来専門化が進むにつれて研究内容も細分化され、あらためて統一的な像が見えにくくなっていること、またこれも20世紀末以来進んだ19世紀政治・社会思想史研究の刷新がプルードン研究に十分反映されていないことが指摘された。狙いとしては、この間の専門研究の成果をふまえてプルードンの思想の分析精度を上げると同時に、彼の思想の統一的な像をあらためて描き出すことが挙げられた。

同書に対するコメントとして、シャルル・フーリエを専門に研究する福島知己からは、以下の点が提示された。同書は「反『絶対』」をキーワードとしてプルードンの著作を生涯にわたって読み解き、社会主義に限らずさまざまな文脈に位置づけることで、マルクスのライバルとか「アナキズム」の祖といった従来のプルードン像の刷新を試みている。主要な質問は以下の三点である。金山は後期の連合主義論や正義論にとりわけ関心があるようだが、相互主義論をはじめとする前期の議論はその視点からどのように捉え直されるか。また前期の著作『人類における秩序の創造』においてプルードンはフーリエ論に多くの

紙幅を割いているが、そのことはどのような意味をもつか。そして、「社会への負債」論をはじめとしてプルドンは複数の社会イメージを抱いているように読めるが、それらが並立していることはプルドンにとってどのような意味をもつか。

次に、プルドンを専門に研究する伊多波宗周より、「反「絶対」」としてプルドン思想を読むという同書の試みの説得性をめぐって、大きく二つの観点からコメントが提示された。一つには、「絶対」ないし「絶対主義」の内実をめぐるもの、もう一つには、「反「絶対」」として読むことの根拠をめぐるものである。前者について、金山の「絶対（主義）」の捉え方は、たとえばプルドンが「絶対主義の三位一体」（資本、政府、カトリシズム）と述べるときの「一体」への意識が希薄なのではないか、関連して、金山のプルドン読解は自由主義的にみえるが、それは戦略的なものなのか否かが問われた。また、後者について、金山は『所有とは何か』から「反「絶対」」の思想を抽出するが、「所有は「絶対的」であるがゆえに批判される」という金山の言に反し、プルドンは権利の相互性が認められるような権利（自由、平等、安全）の方をこそ「絶対的」と呼んでいるというテキスト的事実に即し、いかなる理屈で『所有』を「反「絶対」」と読むことができるのかが問われた。

以上のコメントを受けて、金山がプルドンのテキストに基づきながら丁寧に応答した。最後にフロアの参加者との間で質疑応答を行った。五つほど質問が寄せられ、発表者と討論者を含めて非常に活発な議論がなされた。内容としては、プルドンが二項関係の相互主義から多数の集合へ視点を変更した背景、プルドンの「愛」に関する議論の内実、用益権を基礎づける論理、プルドンに対する自然法論の影響などである。本セッションを契機としてプルドンへの関心がさらに高まれば幸いである。

参加者：約 20 名